

## 006 うさお

音楽の分野や、映像の分野では、今ではデジタルが当たりの前のことになりました。以前、ひとりの学生が音が良いのはMDウォークマンだといひ始めました。その話題で盛り上がりましたが、他の学生が、MDなんて音のデータベースを用いて、音を間引いているので、原音じゃない。真に良いのはCDだと結論つけました。スペック的にはその通りです。人間は20Hzから20000Hzまでの周波数しか聴くことが出来ません。人間の耳のダイナミックレンジは40から50dBです。0.02秒以内の音は全部ひとつの音でしか識別できません。じゃあ、CDの規格なら十分ジャンと言うことになるのですが・・・？やはり、CDの音と生音とでは、別物に聞こえます。



人間の耳は最終的にはアナログですし、頭の中で記憶されている波形などのデータベースと比較をして、これはギター之音だとか、響きがいいとか判断しながら、聴いているわけですが、どうもそれに何かプラスアルファがあるみたい？シックスセンスのようなね！単純じゃあ無いみたい。

うさおは分類したらどちら側の人間なんだろうといつも思います。やはりアナログ的人間なんだろうなって思います。絵はやはりペン書きだし、色付けも基本は筆です。が、最近は色付けはパソコンで行っています。やり直しが楽だから。あつ、アナクロ的人間じゃないよ！（近いけど・・・）

作品名	作家名	感想	評価
窓	乃南アサ	西麻里子は聴覚障害のある高校三年生で、結婚間近の姉、脱サラの兄、兄の親友の新聞記者・有作らに囲まれて暮らしている。レストランで毒入りジュース事件が発生した。容疑者の一人に、麻里子と同じ障害を持つ直久という少年が疑われた。	☆☆ 以前借りてきた本を敢えて借りてきた。乃南アサを再評価して借りたけど、やはりそれ程じゃないなあ。
ボクの町	乃南アサ	警視庁城西署・霞台駅前交番に巡査見習いとして赴任した高木聖大は、研修初日から警察手帳に彼女のプリクラを貼っていた。ドジな警官見習いの話である。道案内、盗難届、ケンカの仲裁などに追われるが、失敗の連続でやる気をなくしていた。が、同期が犯人追跡でケガを負ったことから俄然、職務に目覚める。	☆ はっきり言って詰まんない。ユーモア小説は苦手なのかもしれないな。
凍える牙	乃南アサ	深夜のファミリーレストランで突如、男の身体が炎上した！遺体には獣の咬傷が残されており、警視庁機動捜査隊の音道貴子は相棒の中年デカ・滝沢と捜査にあたる。同じ獣による咬殺事件が続発する。この異常な事件を引き起こしているものは何か？	☆☆☆☆ これも再度借りてきたもの。面白かったのだけれど、ストーリーを殆ど覚えていなかったのはショックだった。
永遠の復讐	松本賢吾	「殺された夫が誰なのか調べてほしい」永井明美の依頼は、奇妙なものだった。内縁の夫が5年間使っていた名前は偽名で、手掛かりは、明美が夫の姉によく似ていること、年1回都心近郊の霊園で誰かと会い、多額の現金を受け取っていたことだけだ。墓掘り人探偵を自称する原島恭介は、行動を開始する。	☆☆ 墓掘り人探偵のシリーズだ。住んでいるのが鶴見の総持寺で、そこにある石材店が舞台らしいので、ついまださされて読んじゃうのさ。
翼の影を追い	福本博文	ストーカー男を脅しては300万円を恐喝し、ラブホテルの壁に穴を開けて、人妻女優とアイドルの痴態を盗撮、元組員と警官を手下に情報入手する。峰岸は探偵として、失踪人・行方不明者の足取りをどこまでも追	☆☆ キャッチは面白そうだったが、逢坂剛の「ハゲタカ」とは比べようも無い、面白みの無い文章力で、がっかりだ

		い、見つけるためには手段を選ばない。友が死んだ。小さな翼という謎の言葉を頼りに「追跡」が始まる。	よ。
藤沢周平全集 第13巻	藤沢周平	人間の檻―獄医立花登手控え。闇の歯車、霧の果て―神谷玄次郎捕物控。	☆☆☆☆ 鶴岡に紀行してから、藤沢が結構好きになった。捕り物帖なので、肩が張らなくていいや。爺さんになったのかな。
よそ者	佐竹一彦	元・警視庁警部補の著者。警察大学校の日の丸教授登場して、東北の田舎町はてんやわんやの大騒ぎ！	☆☆☆ 連絡係りにされた女性警官がいまいち魅力的に書かれていない。それにこの本、以前にも借りているじゃないか。
デュアル・ライフ	夏樹静子	名古屋で建設会社を営む時津逸人は46歳の男盛り。癌の疑いを自覚した時、想いは若き日の切ない恋の記憶へと飛んだ。本当に好きだったあの女、しかし出世のために捨ててしまった…。贖罪の旅は二転三転。そして、男の人生が、裁かれていく。	☆☆ この人は好きな作家の一人だったのだが、最近作品は精彩を欠くなあ。こんなプロット、私でも思い付きますよ。
漂流トラック	安東能明	検問をすり抜け、狭まる包囲網をかわしつつ、空前の金塊強奪作戦を敢行、謎の積荷を抱いて、さらに西へと突っ走る…。飛び交うCB無線、謎の白骨死体、そして物流業界の潰し合い。ロジスティクスの内幕と、トラックたちの魂の叫びを	☆☆ トラック小説なので、見所は面白かったが、三菱のトラックが主役で、少し暗い気持ちに。私の車は三菱社製の車だあ。火の車だぞう！



前は逢坂剛氏を取り上げました。「貴方はプロジューサー」って企画のこともあったし、今回は黒川博行氏をちょっと紹介します。

氏は大阪では結構な著名人のようです。市の催し物に招待されたり、美術展に呼ばれたり、TVのお料理番組に出たりと、多士済々です。では、氏はどんな人かと言うと、こんな経歴です。

1949年、愛媛県生まれ。私と近い年齢です。

京都市立芸術大学彫刻課卒業後、スーパー勤務を経て高校で美術教

師になり、毎年彫刻の個展を開いていた。余談ですが、美術系を出た人間は絵だけではなく、そのほかの才能も多い人が結構居ますね。RAHMENSの二人にしても、池田万寿夫にしても、本職よりもそちらのほうの才能が認められています。

1982年、処女小説「二度のお別れ」でサントリーミステリー大賞佳作を獲得。

1986年「キャッツアイころがった」(文春文庫)で第4回サントリーミステリー大賞受賞。

1996年「カウント・プラン」(文藝春秋)で第49回日本推理作家協会賞を受賞。

作風は、関西を舞台にハードボイルド、警察小説、ばくち小説、チンピラ小説などピカレスクも  
のが多いようです。独特の関西弁ハードボイルドは、ある種、違う世界に私たちを連れて行って  
くれます。

私は「文福茶釜」が好きです。美術骨董品の世界の騙し騙され合いを描いた短編集で、さながら鑑  
定団のようです。美術的蘊蓄が嘘っぽくありません。「よめはんの人類学」では、そのよめはんが書  
かれています。芸大時代に知り合って結婚し、「リリーという名になりたかった」と言う発言や、  
「白眼をむいて寝る」とかが、関西弁のエッセイで語られます。で、よめはんは日本画家で、黒川  
雅子が本名ですが、絵の隅に「はにゃこ」サインが入っています。

関西展、京展、上野の森美術館大賞展、日仏現代美術展 に出展。

天理ビエンナーレ日本画部門賞、加西市花の美術大賞展3回、菅橋彦大賞展2回、川端龍子賞展と  
いう経歴を持つような。すげえ、すげえ。

『ギャンブル考現学』に出てくる、「めめ」ちゃんこと、鷺沢萌はどうやら最近夭折したらしい。